

原著論文 (Article)

## 国語科の「複数教材同時進行自由進度学習」試案

—六年「やまなし」(光村図書)他二教材を組み合わせ—

### Draft of the simultaneous use of multiple educational materials with free progress learning in Japanese language education

森 和久<sup>1</sup>

MORI Kazuhisa<sup>1</sup>

キーワード：自由進度学習，物語文

Key words：free progress learning, narrative text

#### 1. 研究の背景と目的

本稿は、これまで多くの学校で実践されてきた「自由進度学習」の成果を踏まえ、国語科における「複数教材同時進行自由進度学習」の具体的なあり方を考察するものである。

「自由進度学習」は、従来からある学習方法であるが、2021年1月に中央教育審議会より答申された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が提起されたことに伴い、再脚光を浴びている。

中央教育審議会では、奈須(2020)が、加藤(1982)の「指導の個別化」と「学習の個性化」という整理を取り上げ、溝上(2020)が「personalized and self-regulated learning」と概念整理したことを経て、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」を学習者視点から整理した概念として用いるようになった。そして、奈須(2020)はその具体像として1978年にオープンスクールとして全面改築されたことに伴い特色ある教育活動を行ってきている愛知県東浦町立緒川小学校を取り上げ、「指導の個別化」に当たる「はげみ学習(通常の一斉指導等で教わった内容について、その定着度合を個別的に確認し、問題のある箇所に対して行う治療的な再学習)」と「単元内自由進度学習(緒川小学校では「週間プログラム」と呼んでいた)」を紹介している。またその後の別の審議会においても「自由進度学習」の取組は取り上げられ、那須(2021)が1985年ごろの緒川小学校と現在の天童市立天童中部小学校の取組を、中谷(2022)が自校広島県廿日市市立宮園小学校の取組を紹介している。

従来から行われていた「自由進度学習」が、令和の日本型学校教育を推進するという状況下において、「学習者が自らの学習を調整」し、自分に「最適」と考えられる学習を進め

ることで「指導の個別化」を実現するという意味で、再評価されたことが見て取れる。

「自由進度学習」の実施の仕方として、緒川小学校などでは、2教科同時進行の形で行うことも多い。2教科のうちどちらに時間をかけるのか、標準的な学習内容を終えた後の発展学習はどの教科で行うかなど、学習者の自由度が1教科で行う場合より高くなり、学習者の自己調整能力を高めるうえで意義深いと考えられる。

しかし、2教科同時進行で学習した際に、かける時間のウエイトを極端に変える子どもがいた場合、学習指導要領で定められた教科の標準時数を下回ってしまうということも懸念される。こうしたことに対応するためにも、文部科学省は特例校の制度を設け、標準時数の弾力化を図ることができるようにしているが、特例校ではない学校の現状としては、複数教科の「自由進度学習」は、時間数に対するより慎重な管理が必要になる。

また、複数教科同時進行の場合は、教科担任制である中学校はもとより、教科担任制が広がりつつある小学校でも、担当教員や時間割の調整に困難が生じるという制約がある。

その点、一教科の一単元の中で、「自由進度学習」を行う方法は、単元の枠に収まっているという点でも、導入のハードルが低く、行いやすい。しかし、複数教科で行うことでメリットとされていた配分時間のウエイトを選択する余地が生じることや学習順序の選択が広がるということが期待しにくくなってしまふ。

そこで森(2023)は、竹内(2022)が理科専科を担当した際に理科の「二単元同時進行」を行ったことを踏まえ、「同一教科複数単元(教材)」の「自由進度学習」を行えば、教科担任制の場合の時間割の調整困難さが克服され、教科の標準時間数を下回る心配もなく、かつ子どもが配分時間のウエ

<sup>1</sup> 椋山女学園大学教育学部

2023年10月10日受付

イトを選択する余地が生じることや、学習順序の選択が広がるというメリットも享受できると考え、6年「帰り道」（光村図書）他二教材を組み合わせた国語科「複数教材同時進行自由進度学習」を提起した。本稿は、この考え方をもとに、さらに別の教材における「複数教材同時進行自由進度学習」の試案を提示することを目的とする。

## 2. 国語科における「複数教材同時進行自由進度学習」の構想

国語だけの複数単元（教材）のパッケージの仕方としては、基本的には教科書の配列順の教材をセットにするるとよいと考える。「読むこと」の複数単元（教材）の組み合わせや「書くこと」の複数単元（教材）の組み合わせでは、よほど内容に関連性がある場合は効果的かもしれないが、関連性があればあるほど順序の自由度が低くなる可能性が高くなることや、内容が近いだけにかえって子どもが混乱することも危惧される。竹内（2022A）も、（二教科同時進行の場合の）「その組み合わせは、カラーの違う二教科で組み合わせる。例えば理系と文系とか、調べ中心ともの作り中心のような感じである。どちらかが『自分は得意』と思える教科があると意欲が高まりやすい」と述べている。国語という同一教科内であっても、「カラーの違う」組み合わせであった方が、得意、不得意が分散し、子どもの取り組む意欲が高まりやすいのではないかと考える。そして、教科書の単元（教材）配列は、基本的には同じ領域が連続しないような配列になっており、子どもにとっても、教科書の配列に沿った単元（教材）を同時進行する方が分かりやすいと考える。

「自由進度学習」といっても、何を「自由」にするかで、その学習の在り方は大きく異なる。本来は自分のペースで学習するという意味で「進度」を自由にすることで始まった学習ではあるものの、学習の順序、学習方法、学習内容等に選択の自由がある場合もある。当然のことながら、この選択の幅が大きいほど学習の自己調整がより多く行われることとなる。その選択肢を広げるという点で「2教科同時進行自由進度学習」や「複数教材同時進行自由進度学習」は有効であると考え、学習方法に選択の自由をもつことができるような「自由進度学習」を設計する前提として、子どもたちが複数の学習方法を習得していることが必要となる。

国語科の場合、例えば「読むこと」の学習指導要領における指導事項は、ほぼすべて「思考力、判断力、表現力等」の中に位置づけられてしまっているため、読むために習得すべき「知識及び技能」が何であるか明確になっていないという問題がある。現場での実践や教科書の「学習のてびき」で示されている学習の流れにおいては、「中心人物」「設定」「場面」「情景描写」「人物像」「視点」などの学習用語や、「物語の中で、似ているところと違うところを比べて読むと、人物の様

子や気持ちの変わったことがよく分かる」「物語を読むときには、情景のえがかれ方から、人物の気持ちを想像しましょう」「物語を読むときには、人物を表す言葉が、どの視点から語られているのかに着目しましょう」などのような読み方に関する知識を学ぶことが想定されている。しかし、これらは学習指導要領には明確に位置づけられていない。したがって、それぞれの教師が自分の授業を行う際に指導はしていても、どの教師もとりあげるべき事項、どの子どもも身に付けるべき事項として整理されておらず、子どもが学習を行う際に、自らの力で選択できるようにはなっていない。このことが、国語科において学習方法の選択を取り入れた自由進度学習を行う際のネックとなっている。

そこで、子どもたちが（途中で教科書が変わるということがない限り）一貫して用いている教科書の「学習の手引き」の記述を累積し、「自由進度学習」において学習方法を子どもが考える際の選択肢として提示することを考えた。

例えば、光村図書の1年生から6年生の国語教科書の「学習のてびき」において、物語文を読む際、いわゆる「通読」段階で行うよう提起されている学習方法は、次の通りである。

※その物語固有の登場人物名などを用いた表現は一般的な表現にしている。

- ① どんなお話ですか。（ア どんな登場人物が出てきますか。イ どんなことをしていますか。ウ どんなことを話していますか。）
- ② お話の流れを確かめましょう。（ア「中心人物」はどんな人物ですか。イ どんなできごとがおこりますか。ウ「中心人物」は何をしましたか。）
- ③ 確かめたお話の流れをもとにあらすじをまとめましょう。
- ④ 中心人物のしたことや言ったことで、心に残ったことを書き出しましょう。
- ⑤ このお話を読んでどんなことが心に強く残りましたか。
- ⑥ それぞれの場面の登場人物や、書かれている様子を表に整理しましょう。
- ⑦ それぞれの場面について、書かれている様子を思い浮かべながら音読しましょう。
- ⑧ 「○○」について、書かれていることをもとに想像しましょう。
- ⑨ 様子を表す言葉に気をつけて、不思議な出来事を想像しながら読みましょう。
- ⑩ 場所とできごとに気をつけて場面に分けましょう。
- ⑪ それぞれの場面で起こったことと中心人物の様子や気持ちを確かめましょう。
- ⑫ 第○場面と第○場面の様子を比べ、同じところ違うところをまとめましょう。
- ⑬ 「A」と「B」はそれぞれどんな人物でしょう。（語り手から見た「A」、「B」からみた「A」、「A」をそのよう

にみる「B」)

- ⑭ ふしぎだと思った出来事を友だちと話し、考えを深めたいことを問いの形にしましょう。
- ⑮ 設定をたしかめましょう。(登場人物はだれでどんな人か、いつの時代か、季節はいつか、どんな場所がえがかれているか)
- ⑯ 登場人物の会話や様子に着目し、それぞれの場面の登場人物の気持ちや、世の中の様子、出来事をたしかめましょう。
- ⑰ 中心人物はどんな人物ですか。それはどこから分かりますか。
- ⑱ どんな出来事が起こりますか。物語の結びで登場人物はどうなりましたか。確かめながら読みましょう。
- ⑲ この物語を読んでどんなことを感じましたか。簡単に書きましょう。
- ⑳ 「A」と「B」はどのように書かれているだろう。会話や行動を抜き出し、そのときの心情を想像して、短い言葉でまとめよう。
- ㉑ 中心人物の心情の変化をとらえるために、それぞれの場面で中心人物の前に表れたものや、人物を確かめよう。
- ㉒ 中心人物の気持ちを自分と重ねながら想像しよう。
- ㉓ 中心人物にはどのような変化があっただろう。使われている言葉に着目しながら心情の変化をとらえよう。
- ㉔ この物語の山場はどこだろう。
- ㉕ 「B」との関わりの中で「A」の心情がどのように変わっていくかをまとめよう。
- ㉖ 「A」の「B」に対する見方は、何がきっかけで、どう変わっただろうか。
- ㉗ 二人の人物の視点で書かれた物語において、同じ出来事に対するそれぞれのとらえ方や心情を確かめる。
- ㉘ どこから見た、どのような風景がえがかれているか簡単な絵や図に表そう。

本来であれば、子どもが物語文に出会った場合、この28の学習方法のうち、これまで自分が学習した方法については、自ら選択して自力で学習できるようになっていなければならぬ。しかし、多くの場合の国語の学習では、教師の指示によりどのような学習方法で通読をするのか決められ、子どもたちは、教師の指示待ちになってしまっている。これでは、自らの学習を調整する力は育たない。この形を「自由進度学習」にそのまま持ち込み、教師がつくったプリントを順にこなしていくだけの設計にしまったら、結局一枚のプリントにかかる時間だけが「自由」となるだけで、学習方法を試行錯誤しながら自分で選択していく学習にはなっていない。そこで、国語科の「自由進度学習」を計画する場合には、これまでで習得した学習方法を整理して明示し、その中から自分が行くと良いと考える学習方法、自分が好きな学習方法

を選択して行うことができるようにするとよいと考える。

### 3. 国語科における「複数教材同時進行自由進度学習」の具体例

#### 3.1 複数教材の構想

実際に、具体的な教材レベルで考えていくこととする。

そして、今回は光村図書六年「やまなし」[資料] イーハトーヴの夢」「言葉の変化」の三つの教材をひとまとまりとして、試案を考えることとした。

光村図書の教科書及び「単元系統一覧表」によると、「やまなし」と「[資料] イーハトーヴの夢」は「作品の世界をとらえ自分の考えを書こう」という単元に位置づけられている。また「言葉の変化」は、「単元」とは位置づけられず、単独の「教材」という扱いになっている。「単元系統一覧表」においては、教材の欄に「やまなし」と並列されている「[資料] イーハトーヴの夢」は、教科書では9ページにもわたる文章量のある宮沢賢治の伝記であるが、「学習の手引き」や「学習指導書」では、「宮沢賢治の生き方や考え方を知る」ための「資料」としての扱いで、何時間もかけて読むことは想定されていない。「学習指導書」においては、授業時間数として、「やまなし」及び「[資料] イーハトーヴの夢」は8時間、「言葉の変化」は2時間が想定されている。

今回の試案においては、この標準10時間に加え、ガイダンス・学習計画、学習成果の交流を各1時間行うことを想定し、全12時間の計画とする。従って、児童は10時間分を自分で計画することとなる。ガイダンス・学習計画以降の学習の進め方のルールは、次の通りとする。

- ・どの教材から始めても良い。
- ・計画を立てるが、計画はやりながらどんどん修正してよい。
- ・10時間以内なら、どの教材にどれだけ時間をかけてもよい。
- ・45分を分割して取り組んでもよい。
- ・各教材の「基本コース」が終わったら、確認テストを行う。
- ・テストを振り返って、学習できていないところを確認する。
- ・テストの確認が終わったら、好きな教材の発展学習を行う。
- ・最終の時間には、学習に関する交流会を行う。
- ・毎時間、行ったことを学習支援用アプリ等により、教師に報告する。
- ・質問がある際は、いつでも教師にしてよい。教師に質問する以外は原則「一人学び」とするが、友だちと相談してもよい時間帯を適宜設ける。
- ・3教材の「基本コース」を終えたら、3教材いずれかの発展学習を選択して行う。

以下、各教材の学習の進め方について述べることとする。

### 3.2 「やまなし」「[資料] イーハトーヴの夢」の構想

#### 3.2.1 教科書及び「学習指導書」で提起されている学習計画

光村図書国語六年教科書（令和3年発行）の「学習の手引き」で示されている学習活動は以下の通りである。

「とらえよう」

- ・最初に、「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。」とある。どこから見た、どのような風景がえがかれているだろう。本文から谷川の様子が分かるところを見つけ、簡単な絵や図に表そう。

- ・資料「イーハトーヴの夢」を読み、作者である宮沢賢治の生き方や考え方を知ろう。

「ふかめよう」

- ・「やまなし」には、作者の独特な表現が多く用いられている。心を引かれる表現に線を引き、情景を想像しよう。

- ・「やまなし」は、「五月」と「十二月」の二つの場面で構成されている。次の点を、使われている言葉に着目して対比し、感じたことや考えたことをまとめよう。
- ・かへの会話や様子・水や光の様子・上から来たもの

- ・なぜ、作者は、「十二月」にしか出てこない「やまなし」を題名にしたのだろう。理由を考えてみよう。

「まとめよう」

- ・作者がこの作品にこめた思いについて考え、どのような点からそう考えたのかを明らかにして文章にまとめよう。

「ひろげよう」

- ・友達の書いた文章を読み、感想を伝えよう。
- ・自分の考えと似ているところ・自分の考えとはちがうけれども納得したところ など

この記述から分かるとおりの「学習の手引き」における「[資料] イーハトーヴの夢」の位置づけは、いわゆる「第1次」で、「やまなし」を読んだ後に、「作者である宮沢賢治の生き方や考え方を知る」ことをねらいとするものとされている。時間は全体の第2時に充てられていると考えられる。

「学習指導書」においては「[資料] イーハトーヴの夢」の位置づけは異なり、「第2次」で、『五月』『十二月』で描かれている風景を、簡単な絵や図に表す」次に計画されており、「宮沢賢治の生き方や考え方について話し合う」とされている。時間は第3時が充てられている。

いずれにせよ「やまなし」を読むなかで、「[資料] イーハトーヴの夢」を扱い、「やまなし」の読みと関連させるといふ計画になっている。

#### 3.2.2 「やまなし」に伝記教材を組み合わせることに関する考え方

「やまなし」は、光村図書出版の昭和46年版より教科書に

載せられているが、平成13年より伝記教材「イーハトーヴの夢」が組み合わせられた。茅野（2014）は、「イーハトーヴの夢」の特徴として、「子どもと同じ6年生当時の賢治の様子（身長・体重など）を具体的に記し、親近感を与えようとしている」「作品と郷土をつなげ、『郷土を愛する』賢治像を打ち出している」「生き物・自然への眼差しから想像が広がり、童話が生まれたとする」という3つがあると述べている。親近感を与え、「郷土」「生き物・自然」に着目させる効果があるということであろう。

水戸部（2023）は、「やまなし」と「イーハトーヴの夢」とのセットで単元化されていることについて、「その取扱いは多様で、どのように組み合わせれば指導の効果が高まるのかについては必ずしも明らかにされていない」としつつも、「学習の手引き」において、「とらえよう」の段階で「[資料] イーハトーヴの夢」を扱うことについて、学習指導要領の読むことの指導事項小学校5・6学年「オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。」の趣旨を「ある文章の内容を、他の情報と結び付けて考えを『まとめる』ことを指し示していると捉えることができる。小学校高学年では、命や生き方についてある程度多面的に考えを形成していくことが目指される」と捉える自身の考えを踏まえ、「指導事項の趣旨にも合致する位置付け」であり、「『やまなし』と『イーハトーヴの夢』との密接な関連を図った指導が有効なものとなるだろう」と肯定的に見ている。2教材を関連させて読むことで自分の考えがより「まとまる」効果を期待しているのである。

一方、牛山（2012）は「賢治の生き方・考え方が、『やまなし』の話の底に流れているということをつかんでいく実践を取り上げ、「そもそも『作者は』と問うているのだから、子どもたちが賢治を想定するのは仕方のないことで、この問いそのものが作品から作者へ関心を向けてしまうという点では問題ではある。そして、子どもたちは作品から読み取ろうとするのではなく、賢治の伝記から答えを見つけようとした。これが、伝記と組み合わせたときの読みのあり方のもっとも大きな問題である」と、伝記から「答え」を見つけようとする読み方の問題点を指摘している。

茅野（2014）によると、昭和24年度から平成23年度までに刊行された小学校教科書に掲載された1119編の伝記教材に取り上げられた被伝者総数は281名で、宮沢賢治は、福沢諭吉に次ぐ2位の採録回数であった。しかし、現在教科書に掲載されているのは、光村図書の「イーハトーヴの夢」のみである。

牛山（2012）によると、作品と伝記を組み合わせた教材作りの最初のもは、昭和27年の教育出版による「どんぐりとやまねこ」と「伝記を読みましよう」の組み合わせである。以降、東京書籍、光村図書が、賢治の作品と伝記の組み合わせを載せているが、現在まで残っているのは、光村図書のみ

である。

幾田（2012）の調査によると、学習指導要領の位置づけが変わったことが主な原因と考えられるが伝記教材は減少傾向にあり、昭和22～35年度には教科書一種あたりの平均採録数が13.8であったものが、平成23年度以降は1.8となっている。宮澤賢治の伝記が光村図書一社になったことは、伝記教材全体の減少を受けていると考えられるが、作者と作品を関連させる単元がなくなり、作品のみの収録となった要因として、牛山（2012）が「作家の実人生と作品とは別物として読まれるべきである。特に、作家研究を行うのでない限り、宮澤賢治の作品は伝記とともに読まれることで、その世界を狭め、偏ったものにしてしまいかねないからである」と述べているように、作者と作品を分けるべきという考え方が反映されているとも考えられる。

では、逆に「やまなし」と「イーハトーヴの夢」の組み合わせは、なぜ今日まで残ったのだろうか。

先に述べたように、「やまなし」は昭和46年度版の教科書に採録されて以来続いているいわゆる「定番教材」である。したがって、数多くの実践がなされている。その実践史をまとめた東ら（1988）は、次のように述べている。

この作品は、難解だと言われ続けてきた。言葉や文章そのものがわかりにくい上、不明の部分も多く、それが、子どもたちを途方にくれさせる。

子どもたちは、「やまなし」に描かれた世界の、情景の美しさ・清らかさは、直観的に感じとる。しかし、賢治がこの童話に託した願いとか意図（主題や思想）を理解することは、かなりむずかしいようである。

この作品の中心課題が「生死の問題」であることに難解な理由がある。

（中略）

このような作品にせまらせ、理解を深めさせる方法として、賢治の伝記や、「よだかの星」「虔十公園林」などの作品と重ね読みさせることが考えられる。

難しいテキストに遭遇したとき、他のテキストと重ね合わせ、関連させて自分の理解を図ろうとすることは読書をするなかで私たちが自然に行うことである。他のテキストとは、その作者の他の作品かもしれないし、作者の人となりを示すものかもしれない。検索をして、「解説」「ネットの評価」「他者の解釈」を調べることもあり得るだろう。そうした他のテキストに触れることは、確かに牛山が指摘するように「その世界を狭め、偏ったものにしてしまいかねない」恐れはある。しかし、現代においては他のテキストなどの情報を止めることはできない。むしろ問題なのは情報を精査しよく考えることをせずに、一つの解釈、一つの主題を鵜呑みにしてしまうことだろう。「やまなし」について市毛（1987）が「いわゆ

る『主題指導』が通用しない作品として知られている」と述べ、また田近（1996）が、「ただ一つの解釈を絶対的なものとして許さない、ただ一つの受け止め方の中には納まらない、そして、深い思索の対象でありながら、個性的な感応の磁場でもある—それが賢治童話の魅力であろう。そんな多様な作品の魅力を、教材としての可能性の原点としなければならない」と述べているように、「やまなし」は一つの読み方、一つの主題に収斂しにくい作品であり、どこに魅力を感じるか（あるいは感じないか）、「やまなし」を読んで何を考え、何を感じたかは、読み手一人一人にゆだねられるべきだと考える。

難解であり、多様な読みが生じうる「やまなし」だからこそ、他のテキストや他者の読みに触れ、さらに考えを深めたいくなることは自然であり、あくまでも相対化されるべきテキストの一つとして、つまり「資料」の一つとして「伝記」があることは是であると考えられる。1897年11月の教育雑誌「現代教育科学」において「『やまなし』で教師の力量が問われる」というタイトルの特集が組まれるほど、手応えのある「やまなし」だからこそ、多様なテキストと関連づけて読み、多様な読み方と交流することは意義深いと考える。

こうした意味において、「やまなし」と「イーハトーヴの夢」の組み合わせは、今日までその意義を失わず、継続して実践され続けてきたのではないかと考える。

### 3.2.3 「やまなし」に伝記教材を組み合わせていることを生かした学習の在り方

前項の検討を踏まえると、「やまなし」と「[資料] イーハトーヴの夢」や他の資料、作品を組み合わせて読み、自分の考えをまとめ、交流するという学習が有効なのではないかと考える。そして、実際にそうした実践提案は多くみられる。

山本（2021a）は、2021年度に、教育科学国語教育誌上において「国語科のパフォーマンス課題と評価」について連載しているが、その具体例として、京都教育大学附属桃山小学校の長野教諭の「やまなし」の実践を紹介している。長野教諭の作成したパフォーマンス課題は次の通りである。

あなたは、物語の研究者です。宮澤賢治作「やまなし」は、辞書にのっていない、賢治が創作した表現が登場するために、読者のなかには、どのように理解すればいいのかわからない人がいます。あなたは、物語の研究者として、「やまなし」をどのように理解しますか？ 賢治の他の作品や、賢治についての伝記を読んで、「やまなし」の理解を深めましょう。そして、あなたの「やまなし」についての理解を、読者に向けて解説しましょう。

このように長野教諭は「賢治の他の作品や、賢治についての伝記を読んで、『やまなし』の理解を深める授業を構想し

ている。ただし、その前提として山本 (2021a) は「伝記は作者による賢治理解が表現される場合があるため、無批判に受け入れるのではなく、検討の対象として位置づける必要がある」としている。伝記教材を読んでそこに書いてあることから「やまなし」を読むということではなく、あくまでも資料の一つとして読むという考え方が見て取れる。

そして、山本 (2021b) によると長野実践では、次の4つの教育目標のもと授業を進めている。

- ① 物語の世界を捉えるために、題名、構成、擬音語、擬態語、比喩表現、色彩表現の効果を分析することができる。
- ② 作者に関する伝記や資料を読んで、作者の考え方や生き方を想定することができる。
- ③ 作者の他の作品を読んで、共通点や、物語の理解に役立つ内容を指摘することができる。
- ④ 作者の考え方や生き方、他の作品の理解を踏まえて、物語の理解を深めることができる。

この4つの目標は、「やまなし」の読み「題名、構成、擬音語、擬態語、比喩表現、色彩表現の効果を分析」し、伝記や資料、他の作品を読んだことを踏まえて、「物語の理解を深める」というように学習活動と対応していると考えられる。そして、山本 (2021c) によると、評価のためのルーブリックの観点として、「①題名、構成、擬音語、擬態語、比喩表現、色彩表現の効果の分析」「②作者の考え方や生き方の想定」「③他の作品との共通点・相違点の分析」の3つを掲げている。目標の④に対応する学習活動で、最終的にまとめた成果物を3つの観点で評価するということだろう。

上の例は最終的に「やまなし」をねらいとしているが、「宮沢賢治という作家」をゴールとしている実践もある。溝上 (2022) は、「作品の世界をとらえ、『子どものための賢治入門』をつくろう」という学習課題を設定し、自ら考えた問いを解決し、「解説文」をつくる取り組みを提起している。そして例えば「対比して考える」「構成の相違点・共通点に着目する」「作者の生き方とつなげて考える」などの解決策を「目次化」しすぐに参照できるようにするとともに、「子どものノートや振り返り等の記述等をデジタル共有」するようにしている。

江口 (2019) は、「作者の考え方を収集し、その考え方を複数の物語の内容に関連づけて、『宮沢賢治プレゼンテーション会』を開く」という課題を提示し、「やまなし」「イーハトーヴの夢」他の賢治の作品を読み、考えたことを発表する学習を組織している。

これらの実践は、最終的に「やまなし」について論じることがゴールなのか、宮沢賢治について論じることがゴールなのかの違いはあるが、「やまなし」に加え、伝記や他の作品等を生かして、自分の考えをまとめるという学習の機会と

なっている。

### 3.2.4 「やまなし」「[資料] イーハトーヴの夢」を生かした自由進度学習の設計

ここまでで見てきた「やまなし」に加え、「[資料] イーハトーヴの夢」や他の資料、作品を活用した学習を、学習方法の選択を取り入れた自由進度学習で行うことは、以下の点において、子どもが選択できる自由度が高めやすく、メリットが大きいと考える。

- ・ゴールを「やまなし」論にするか、「宮沢賢治」論にするか
- ・他にどの資料、作品を扱うか
- ・どの学習活動に重点をおくか
- ・どの順で学習活動を行うか。「[資料] イーハトーヴの夢」をどのタイミングで扱うか (第1次、第2次、第3次のどこで扱うか)

このメリットを生かし、基本的には「やまなし」について自分の考えをまとめるというゴールを設定し、発展学習まで行う余裕のある場合は、宮沢賢治の他の作品も読んだうえで「宮沢賢治」あるいは「宮沢賢治の作品」について自分の考えをまとめるというゴールに向かうこととした。そして、「[資料] イーハトーヴの夢」をいつ扱うかについても選択できるようにした。(「資料：自由進度学習用プリント」[0](#)参照)

「やまなし」の学習は、いわゆる「学習の手引き」に沿って、「とらえよう」「ふかめよう」「まとめよう」(いわゆる第1次、第2次、第3次)の段階を踏むこととし(「ひろげよう」は、最後の学習成果発表会で行う)、それぞれのガイドとなるプリント[A1](#)、[A2](#)、[A3](#)を用意した。

最初の「とらえよう」は、先に示したように、これまで28の学習が行われてきた。これらの学習を整理し、物語を概観するときの学習方法として再現しやすく整理したものが次の①～⑨である。

- ① 設定をたしかめる。(登場人物はだれでどんな人か、中心人物はだれか、いつの時代か、季節はいつか、どんな場所がえがかれているか)
- ② 場所とできごとに気をつけて場面に分け、場面と場面のつながりを捉える。
- ③ あらすじをつかむ。(ア それぞれの場面の登場人物の様子・気持ち、できごとや、書かれている様子を表に整理する。イ 何がどのように変化したか、それはなぜを考え「何がどう変化したか」をまとめる。)
- ④ 物語の山場はどこか考える。
- ⑤ 物語を読んで心に残ったことを書き出す。
- ⑥ 物語を読んで疑問に思ったことや読み深めたいことを書き出す。
- ⑦ 書かれている様子を思い浮かべながら音読する。
- ⑧ どこから見て物語が語られているか考える。(特に二人以上の視点で書かれた物語の場合、それぞれの視点でのと

らえ方や心情を比べる。)

- ⑨ どこから見た、どのような風景がえがかれているか簡単な絵や図に表す。

この9つの学習方法を踏まえて作成したものがプリントのA1-1である。なお、⑨は①②③⑧を総合した活動で、「やまなし」の学習に合うよう設けた。そして⑨の活動は必須としてあとは自分が行ってみたい学習、行うとよいと考える学習を行うよう選択できるようにしている。また、従来行ってきた活動ではあるが、どんなことを行うのか思い浮かびにくい場合のために、ヒントとなるA1-2のプリントを、⑨の学習がどのようなものかイメージしやすくするためにA1-3のプリントを用意した。

次に、「ふかめよう」の学習ではどのような学習が行われてきたのか、「とらえよう」と同様に、これまでの学習を洗い出し、整理した学習方略が次の①～④である。

- ① 場面の様子や登場人物の心情・様子を具体的に想像する。
- ② 場面の様子や登場人物の心情・様子の(変化の)理由を(場面と結び付けて)考える。
- ③ 登場人物の人物像(性格、プロフィール、行動パターン、考え方)を考える。
- ④ 特別な表現(繰り返し出てくる表現、題名、情景描写、色彩表現、例えの表現、作者の独特な表現)に着目し、(物語全体と結びつけて)その効果を考える。

この内容を示したものがプリントA2である。このうち④は、必ず取り組む活動として指定している。また、各活動を「やまなし」で行う場合のヒントを載せている。

同様の考え方で「まとめよう」のプリントA3には、これまでの物語分の学習で行ってきたことを次の①～④に整理し掲載した。

- ① 心を動かされたこととその理由を書く。
- ② 自分と比べて考えたことをまとめる。(自分だったらどうするか、物語を読むことで自分の気持ちや考えにどのような変化があったかなど)
- ③ くわしく読んだときに問題になったことに関する自分の考えを書く。
- ④ 物語のみ力をまとめ、人に伝える文章を書く。

そして、今回はじめての取り組みとして、⑤⑥の2点を掲げた。

- ⑤ 作者がこの作品にこめた思いは何だと考えるかを書く。
- ⑥ 作者の生き方や考え方を他の資料から考え、「やまなし」と関連付ける。

従来の物語の教材で、教科書が想定している学習活動を行ってきているとすれば、児童は「作者」に着目して読むということをしてきていない。(光村図書4年上「一つの花」の「たいせつ」という欄には「作者の思い」という言葉が唯一出てくるが、学習活動としては記載されていない。)それは、あくまでも「物語」そのものを読んでどのように感じ、考え

たかを重視し、「作者の思い」を到達点とするような読みが求められていないことの表れであると考え。しかし、今回は、資料としての伝記を含めて読み、「やまなし」への理解をより深めるということをねらいとしているため、「作者がこの作品にこめた思い」や「作者の生き方や考え方」を扱うこととしている。しかし、これらはあくまでも「自分の考え」として書くことを求めており、「作者」に正解を求めるというスタンスには立っていない。伝記の扱い方も「あくまでも筆者の宮沢賢治像」であることの説明も加えてある。

「やまなし」の理解を深めるための「資料」である「イーハトーヴの夢」の学習として、次の①～④を想定した。

- ① 出来事や話したことや行動したこと、残した作品が誕生した背景などを年表にまとめる。
- ② 「[資料] イーハトーヴの夢」から考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。
- ③ 他の資料を見たり読んだりして考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。
- ④ 自分が考えた「賢治の生き方や考え方」と「やまなし」を関連づける。→A3⑥の学習につなげる

そして、「やまなし」の学習のどの段階に位置づけるのか子どもが意図をもって選択できるように「この学習を行ううえでの注意点」と合わせ、プリントBを作成した。

これらのプリントを参考に、自分の学習を計画して遂行していくことを期待しているが、さらにヒントが必要な場合や、一斉授業の形式で説明が必要な場合など、実態に応じた支援がさらに必要となると考えられる。

プリントで必須とされている活動を中心に「まとめよう」まで終えた子ども向けに、A3及びBのプリントには、次の発展学習が提起してある。

- ・宮沢賢治の他の作品を読んで考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。
- ・「やまなし」「[資料] イーハトーヴの夢」、他の資料、他の作品を読み、宮沢賢治やその作品について考えたことを文章にまとめる。

「やまなし」だけではなく、他の作品や資料を読み、総合的に「宮沢賢治」または「宮沢賢治の作品」に関する考えを書くものとなっている。読書への発展として、「同じ作家の作品を読もう」というような働きかけはよくあるが、その延長として、その作家やその作品について自分なりの考えをもつことは自然なことで、それがあからこそ「好きな作家」「好きな作品群」が生じるのだとも言える。この発展学習は、一つの作品だけでなく、より多くの情報から自分の考えを述べる貴重な機会になると考える。

### 3.3 「言葉の変化」の構想

「言葉の変化」は、「時代によって言葉が変化すること」と「世代によって異なる言葉を使う場合がある」ことを説明し、

「だれにでも分かりやすい言葉を使うように」促す「言葉の使い方」に関する教材である。

「学習指導書」では、2時間完了で「昔と今の変化」「世代による言葉のちがいを各1時間行い、それぞれ教科書の記述を理解したうえで、他の例を調べる活動が提起されている。角田（2021）も同様の流れで世代の違う人へのインタビューなどの「調べ学習」を提起している。

時代による変化や世代による違いについては、文化庁が毎年行っている「国語に関する世論調査」を参考にしつつ、「推し」「盛る」などの新しい表現について調べることや、いわゆる「女ことば」のような性差について調べることへの発展も考えられ、大変興味深い内容である。プリント④では、発展学習として、「『時代によって言葉が変化する』原因を調べる。また、変化することに関して様々な意見があることを調べる。そのうえで、自分の考えをまとめる。」学習を提起している。「やまなし」の発展学習同様、「自分の考えをまとめる」ことをゴールとしている。

教科書の記述は、比較的スムーズに理解できると考えられるので、自由進度学習では、「やまなし」の学習との時間配分の兼ね合いを考えながら、どれだけ自分が調べたいテーマについて調べてまとめる活動を行うかということが選択肢になると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、国語科における「複数教材同時進行自由進度学習」を、「やまなし」他二教材で具体化することを試みた。「やまなし」と「[資料] イーハトーヴの夢」は、関連させて読む教材、「言葉の変化」は、独立した言語教材である。関連させて読む学習ではあるが、自由進度学習だからこそ、関連のさせ方に自由度が生じる。発展学習を行うかどうか、また行うとすればどのような学習を行うかで、ゴール設定に自由度が生じる。しかしながら、発展学習を行わない場合も、また物語の読みで発展学習を行う場合も、言語教材で発展学習を行う場合も、最終的には、「自分の考えをまとめる」学習となり、最後の成果発表会に結び付けることができる。どこに力点を置いて学習を計画するか、どういう順で学習するか、どのような学習方法を取るかなど選択の余地を多く取った自由進度学習のメリットが期待できる学習になるのではないかと考える。

#### 引用・参考文献

愛知県東浦町立緒川小学校（1983）『個性化教育へのアプローチ』。明治図書、東京。  
東悦子・金城喜代美・大社浩子（1988）小学六年やまなし（宮澤賢治）。『作品別文学教育実践史事典・第二集—小学校

編一』浜本純逸他編、明治図書、東京。  
幾田伸司（2012）戦後小学校国語教科書における「伝記」教材の変遷。鳴門教育大学研究紀要、27: 215-224。  
市毛勝雄（1987）読書のよろこびにつながる指導を。現代教育科学（1987年11月）、明治図書、東京。  
牛山恵（2012）宮沢賢治童話の教材史—文学作品と小学校「国語」教科書との関連—。全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット2巻。  
江口健一（2019）主体的な学びのための「学習課題」。教育科学国語教育（2019年5月）、明治図書、東京。  
加藤幸次（1983）『個別化教育入門』。教育開発研究所、東京。  
角田歩美（2021）言葉の変化。『板書&イラストでよくわかる365日の全授業小学校国語6年下』大江雅之編著、明治図書、東京。  
茅野政徳（2014）戦後小学校国語検定教科書における宮沢賢治の伝記教材の変遷。国語科教育、75: 32-39。  
竹内淑子（2022）『新装版 教科の一人学び「自由進度学習」の考え方・進め方』。黎明書房、名古屋。  
田近洵一（1996）賢治童話の教材としての可能性。『授業に生きる宮沢賢治』。日本国語教育学会編、図書文化、東京。  
中谷一志（2022）『自立した学び手』の育成を目指した自由進学習の取組。義務教育の在り方ワーキンググループ第2回資料。https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/20221121-mxt\_syoto02-000025909\_3.pdf（2023年10月1日閲覧可能）。  
奈須正裕（2020）個別最適化された学びについて。教育課程部会第118回資料。https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt\_kyoiku01-000008845\_2.pdf（2023年10月1日閲覧可能）。  
奈須正裕（2021）個別最適な学びと協働的な学び—その子らしさが発揮できる自律した学びの保障—。特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援に関する有識者会議第2回資料。https://www.mext.go.jp/content/20210825-mx\_kyoiku02-000017710\_001.pdf（2023年10月1日閲覧可能）。  
広島県廿日市市宮園小学校（2022）「協働し、主体的に学ぶ児童の育成—自由進度学習の取組を中心として—」。『個別最適で協働的な学びをどう実現するか—令和の授業イノベーションを考える—』。ぎょうせい、東京。  
溝上慎一（2020）令和の日本型学校教育における「個別最適な学び」「協働的な学び」についての概念的考察。教育課程部会第121回資料。https://www.mext.go.jp/content/20201023-mxt\_kyoiku01-000010203\_2.pdf（2023年10月1日閲覧可能）。  
溝上剛道（2022）作品の世界をとらえ、『子どものための賢治入門』をつくらう。教育科学国語教育2022.9、明治図書、東京。  
光村図書出版（2020）『小学校国語 学習指導書』。  
水戸部修治（2023）小・中学校9年間を見通した「命と自己



の生き方を見つめる教育」に向けた国語科の系統的な指導に関する研究。京都女子大学宗教・文化研究所。研究紀要、36: 83-100.

森和久 (2022a) 小学校国語科における物語文を「読むこと」の「知識及び技能」に関する考察—教科書の「学習の手引き」の記述を手がかりに—。椋山女学園大学教育学部紀要 15: 73-80.

森和久 (2022b) 「個別最適な学び」の意義と国語科における課題に関する考察。「楽しく深い学び」を創る国語科授業研究会紀要、5: 70-79.

森和久 (2023) 「学習方法」の選択を多く取り入れた国語科「複数教材同時進行自由進度学習」試案—6年「帰り道」(光村図書) 他二教材を組み合わせて—。「楽しく深い学び」を創る国語科授業研究会紀要、6: 63-80.

山形県天童市立天童中部小学校 (2021) 子どもも教師も変容する単元内自由進度学習への取組。『令和の「個別最適な学び・協働的な学び」—学びのパラダイムシフト—』。ぎょうせい。東京。

山本はるか (2021a) 学びの本質に迫る国語科のパフォーマンス課題と評価、第3回 教材研究とのつながり。国語教育 (2021年6月)、明治図書。東京。

山本はるか (2021b) 学びの本質に迫る国語科のパフォーマンス課題と評価、第4回 授業者・教室の持ち味とつながり。国語教育 (2021年7月)、明治図書。東京。

山本はるか (2021c) 学びの本質に迫る国語科のパフォーマンス課題と評価、第6回 ルーブリックと教師の評価観。国語教育 (2021年9月)、明治図書。東京。

資料：自由進度学習用プリント

教科書一〇三ページ〜二九ページ  
**学習計画を立てよう**

全12時間(自由進度の部分は10時間)

① ガイダンス(学習計画) 1時間

② 「やまなし」(標準6時間)

③ 「資料」イーハトーヴの夢(標準1時間)

※ 今回は①と②は関連しています。

①と②の学習のゴール

「やまなし」について自分の考えをまとめる。

★発展学習 「宮沢賢治(の作品)」について自分の考えをまとめる。

③ 「言葉の変化」(標準2時間)

学習のゴール

「時代によって言葉が変化すること」と「時代によって使う言葉が違うこと」を理解する。

★発展学習 「時代による変化」「世代による違い」等について調べ、自分の考えをまとめる。

④ 学習成果発表会 1時間

どの教材から始めても良い。ただし②をいつ行うかはBの資料「この学習を行ううえで」の注意点を参照して考える。

計画を立てるが、計画はやりながらどんどん修正してよい。

10時間以内なら、どの教材にどれだけ時間をかけてもよい。

45分を分割して取り組んでもよい。

最終の時間には、学習に関する交流会を行う。

毎時間、行ったことを学習支援用アプリ等により、先生に報告する。

質問がある際は、いつでも先生にしてよい。教師に質問する以外は原則「一人学び」とするが、友だちと相談してもよい時間帯を毎時間設ける。

3教材の基本的な学習を終えたら、「A3⑦」及び「B⑥」または「C③」の発展学習を行う。(この他の発展学習を考えてもよい)

## 「やまなし」とらえよう

A1-1

次の①から⑨までで、やってみたい学習を行おう。(⑨は必ず行う) 標準は1時間

教科書の「学雷」のページにあるように、物語の学習は、「とらえよう」「かめよう」「まよめよう」「ひびきよう」の流れで進めることが一般的です。今回は「とらえよう」です。

これまでの物語文の「とらえよう」で、教科書ではどのような学習を勧めているのか紹介します。(1年生から6年生までの教科書に書いてあることを整理したものです。)これから自分が行う学習の参考にしましょう。

- ① 設定をたしかめる。(登場人物はだれでどんな人か、中心人物はだれか、いつの時代か、季節はいつか、どんな場所がえがかれているか)
- ② 場所とできごと(こと)に気をつけて場面に分け、場面と場面のつながりを捉える。
- ③ あらすじをつかむ。(ア) それぞれの場面の登場人物の様子・気持ち、できごとや書かれている様子を表に整理する。イ 何がどのように変化したか、それはなぜを考へ「何がどう変化したか」をまとめる。(イ)
- ④ この物語の山場はどこか考える。
- ⑤ この物語を読んで心に残ったことを書き出す。
- ⑥ 物語を読んで疑問に思ったことを読み深めたことを書き出す。
- ⑦ 書かれている様子を思い浮かべながら音読する。
- ⑧ どこから見て物語が語られているか考える。特に二人以上の視点で書かれた物語の場合、それぞれの視点でのとらえ方や心情を比べる。
- ⑨ どこから見た、どのような風景がえがかれているか簡単に絵や図に表す。

※ 選んだ活動でうまく「やまなし」がとらえられな場合は、違う活動を試みましょう。

## 物語の学習の仕方」とらえよう

A1-2

① 設定

- ・ 「登場人物」は、人間のように考えたり、話したりしていれば、人間でなくても登場人物になります。(「たぬきうね」の「た」は登場人物ですが、「大造じいさんとガン」の「残雪」は登場人物ではありません。)
- ・ 「場所」「時代」は、わかる範囲でとらえればよいです。「つばき」は戦争中から戦後の日本とわかります。「スイミー」は「海の中」とはわかりますが、「いつ」の話かはわかりません。

② 場面

- 場面分けは、一行空き、数字などで区切られているものもあります。区切られていない場合は、場所、時間の流れ、できごとの変化などで区切ります。どうしてそのように区切るのかを考えると、場面と場面のつながりがわかり、③④にもつながります。

③ あらすじ

- 物語では、何かの変化が重要なことが多いので、「何がどう変化したか」どうして変化したのか」を書くことがよいです。例えば「大きなかぶ」は「抜けなかつたかぶが、みんなの協力で抜けるようになった話」とまとめることができます。小さなかぶが加わったことを強調し「抜けなかつたかぶが、最後に小さなかぶの力が加わったことで抜けるようになった話」と言う人もいられるかもしれません。あらすじは、その物語を読み手がどうとらえるかわわってくるので、正解が一つとは限りません。

④ 山場

最も変化があったところを山場ととらえることがよいです。

⑤ 感想・疑問・課題

- 感想を書くためには、「思ったこと」「疑問に思ったこと」を、本文に書きこみをするといです。疑問に思ったら「？」、「すい」と思ったら「！」のように記号を決めておくと簡単です。また、気になる部分に線を引くのもよいですね。

⑥ 視点

- 六年「帰り道」で学習しました。どこから見て物語が語られているかを考えます。特に「帰り道」のように二人の人物の視点で語られている場合は二人のとらえ方や心情を比べることがよいです。(詳しくは「帰り道」プリントを見よう)

A1-3

川下

川底

川上

二 十二月

五月と同じように書き表し、五月と比べよう。

かこの父

川底

川上

一 五月

「五月」と「十二月」を図や絵で表す。

左の図は川を横から見た断面図だとして、かこの父、かこの兄、かこの弟、魚、かわせみなどはどこに書き表せるだろう。かこの父の例のように絵や言葉をその位置に示そう。

参考「学習指導書」

A2

## 「やまなし」 ふかめよう

物語の学習でこれまで行ってきた「ふかめよう」を整理すると①から④になります。これらの中でやってみたい学習をしましょう。また、自分で立てた問いを考える学習を行ってもよいです。(②④には必ず取り組む) 標準は3時間

① 場面の様子や登場人物の心情・様子を具体的に想像する。

② 場面の様子や登場人物の心情・様子の(変化の)理由を(場面と結び付けて)考える。

③ 登場人物の人物像(性格、プロフィール、行動パターン、考え方)を考える。

④ 特別な表現(繰り返し出てくる表現、題名、情景描写、色彩表現、例えの表現、作者の独特な表現)に着目し、(物語全体と結びつけて)その効果を考える。

※ヒント 次のような学習の例があります。

① 「五月」と「十二月」で、できごとやかこの様子や心情を比べる。

② 「五月」と「十二月」で、かこの様子や心情が違う理由や意味を考える。

③ 3匹のかにがそれぞれどんな人物かを考える。

④ 「クランボン」などわかりにくい言葉について考え、調べる。  
 ・心を引かれる言葉や表現をもとに情景を想像する。  
 ・「五月」と「十二月」で、色に関する表現などがどう違うか比べる。  
 ・なぜ題名が「やまなし」なのか考える。

A 3

### 「やまなし」 まとめよう

ここでは、「やまなし」を読んで考えたことを文章にまとめます。 標準は2時間

物語の学習では、「これまで」に物語を読んで感じたことや考えたことをまとめてきました。まとめる際の観点として、さきのようなものがありました。書くときの参考にしましょう。

- ① 心を動かされたこととその理由を書く。
- ② 自分と比べて考えたことをまとめる。(自分だったらどうするか、物語を読むことで自分の気持ちや考えにどのような変化があったかなど)
- ③ くわしく読んだときに問題になったことに関する自分の考えを書く。
- ④ 物語のみ力をまとめ、人に伝える文章を書く。

今回新たに次の観点を加えます。(⑤⑥は必ず行う)

- ⑤ 作者がこの作品にこめた思いは何だと考えるかを書く
- ⑥ 作者の生き方や考え方を他の資料から考え、「やまなし」と関連付ける

#### ※ ヒント

・ 「作者がこの作品にこめた思い」は、作者にもわからない場合があると言われます。ですから、一つの「正解」があるわけではありません。「私は、作者はこういうことを伝えたかったと考える」ということを、理由を示して書いてください。

・ 「作者がこの作品にこめた思い」を考えるとき、「作者はどんな人か」知りたくなることがあると思います。「資料」イーハトーヴの夢」はその参考になります。ただし、「ここに書かれていることは、あくまでも筆者である畑山博さんの宮沢賢治像です。この文章だけで宮沢賢治の生き方をとらえることは危険です。Bのプリントに書いてあるように、できれば他の資料も参考にするとよいです。

#### ※ 発展学習

- ⑦ 「やまなし」「資料」イーハトーヴの夢」、他の資料、他の作品を読み、宮沢賢治やその作品について考えたことを文章にまとめる。

### B 「資料」イーハトーヴの夢

「資料」イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方について考えます。主な学習活動は次の通りです。(②、④は必ず行う) 標準1時間

- ① 出来事や話したことや行動したこと、残した作品が誕生した背景などを年表にまとめる。

- ② 「資料」イーハトーヴの夢」から考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。

- ③ 他の資料を見たり読んだりして考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。

- ④ 自分が考えた「賢治の生き方や考え方」と「やまなし」を関連づける。↓ A 3⑥の学習につなげる。

#### ※ この学習を行ううえでの注意点

・ 「資料」イーハトーヴの夢」は筆者畑山博さんがとらえた宮沢賢治像ですから、一つの資料だけではなく複数の資料に当たった方がよいです。そういう意味で「③」の活動も行った方がよいです。

・ 「賢治の生き方や考え方」を捉えたうえで「やまなし」を読むと、「生き方や考え方」から「やまなし」の答えを見つめるような読み方になってしまい、自由に「やまなし」を読む楽しさがうばわれる心配もあります。一方、「賢治の生き方や考え方」を捉えることで「やまなし」の読みがより深くなることも期待できます。自分なりに「やまなし」の読みが進んで、疑問に思うこと、わかったことがはつきりしてから「資料」イーハトーヴの夢」を読んだ方がよいとも考えられます。この「B」の学習を「とらえよう」「ゆかめよう」「まとめよう」のどこで行うとよいか、自分なりに考えて、決めましょう。

- ・ ③は発展学習として行ってもよい。

#### ※ 発展学習

- ⑤ 宮沢賢治の他の作品や他の作品を読んで考えた「賢治の生き方や考え方」を文章にまとめる。↓ A 3の発展学習⑦につなげる

## c 言葉の変化

「時代による言葉の変化」「世代による言葉のちがひ」について理解する。

(①②は必ず行う) 標準2時間

① 教科書の説明を読み「時代による言葉の変化」「世代による言葉のちがひ」があることを理解する。

② 「時代による言葉の変化」「世代による言葉のちがひ」の教科書以外の例を探します。

### ※ 発展学習

③ 「時代によって言葉が変化する」原因を調べる。また、変化することに関して様々な意見があることを調べる。そのうえで、自分の考えをまとめる。

### ※ ヒント

文化庁が毎年国語に関する世論調査を行っており、参考になります。令和4年度の調査では、「推し」「盛り」などの表現について、「気になるか」「気にならないか」調査しています。年齢が高いほど「気になる」割合が高い傾向にあり、「時代による言葉の変化」が、「世代による言葉の違い」を生んでいるとも考えられます。あなたは、例えばこのような言葉の変化についてどう考えるでしょうか。